

●モノグラフ小学生ナウ



学業成績

vol.3-3

©1983(株)福武書店 教育研究所/加藤智穂・賀川雅子・江原有輝子・田中美幸
放送大学教授 深谷昌志



目次

特集／成績モノカルチャー	2
調査レポート／学業成績	
要約と提言	8
1. 勉強の得意・不得意はどの程度か	10
● 授業の理解度	10
● 成績は努力を反映する	15
2. 勉強の得意・不得意とその背景	20
● 成績と家庭学習	20
● 授業に臨む態度	22
3. 成績の良し悪しと自己像との関連	27
● 成績の良い子どもの自己像	27
● 成績下位群の自己像	31
まとめに代えて	36
● 成績と努力との分離を	36
シリーズ／子ども考現学	
子どもの姿・昔と今(13) 子ども雑誌	38
資料1・調査票見本	43
資料2・学年・性別集計表	50

成績モノカルチャー

放送大学教授 深谷昌志



はたち過ぎればただの人

少し前に評判になった本に、ブラウゼの『天才の通信簿』（丸山・加藤訳 講談社）がある。これは、俗に天才と呼ばれる人の子ども時代の成績をまとめたもので、中にはカント、デカルト、ヘーゲルのように「せん檀は双葉より芳し」そのものの人生を歩んだ者もいる反面、落第生が天才に化けた事例も少なくない。ブラウゼによれば、エジソンやノーベル、リンカーン、ルソーなどが、その典型だと言う。

もちろん、こうした指摘に、一面の真理が含まれているのは確かだが、その反面、これらの偉人は、スケールが大きいだけに、学校

の規格にはまらなかったとも考えられる。例えば、よくできるので、学校の進度にもおたりなさを感じ、不適應を起こす。あるいは、教科間の得意、不得意の差が大きく、得意な教科しか関心を持ってない……である。

こうした天才の子ども時代はともあれ、日本にも、「はたち過ぎれば、ただの人」という言いまわしがある。これは、子ども時代の成績の良し悪しが必ずしも、未来に関連しないことを経験的にとらえての言いまわしであろう。

確かに、子ども時代には、とりあえず記憶力に恵まれた子どもが目につく。記憶力が優れていれば、漢字やかけ算などを覚えるのは容易であろう。しかし、学年が上がるにつれ

て読解や文章題などが増えるので、学習には洞察力や関連づける力に象徴されるような総合力が必要となる。それと同時に、学習内容も難しくなるので、記憶力に頼り、学習努力を怠ったのでは、良い成果を期待できなくなる。

もちろん、子どもが、中学、そして、高校へ進むにつれて、学習に、努力が求められる比率が増加していく。まして、社会人になれば、社会的な達成に求められる資質は多岐に及んでくる。

研究者の場合、頭脳の働きが必要な職種という見方が定着している。しかし、研究者としての率直な感想を述べるなら、研究者に求められるのは、なによりも、睡眠時間が短くても頑張れる体力、そして、ひとつのテーマを追求していくねばり強さ、さらに、遊びたい気持ちを押える禁欲的な態度であるように思われてならない。

したがって、運・鈍・根という人生調が、研究者にもびったりあてはまるのを感じる。そうした鈍や根と比べれば、知的な可能性の幅などはささいな要因にすぎない。実際にも、知的な可能性に恵まれた仲間たちの何人かが、ある者は病弱のため、他の者は禁欲的な生活に耐えきれずに研究生活を断念したのを見聞きしてきている。

大学時代の成績が上記の通りなのであるから、まして、小学校時代の成績は、良いにこしたことはないとしても、それほどのこだわりを持つ必要はあるまい。むしろ、成績が不振ぎみでも、気にとめるまでもないのと思う。

基本的属性としての成績

しかし、子どもを対象とした調査データを読んでいると、子どもたちがどうしてこれほどまでに、学業成績にこだわりを持つのか、理解に苦しむことが多い。

社会学の用語に、基本的属性と呼ばれる概

念がある。これは、人々の意識を規定する属性という意味で、通常、性や年齢、職業、学歴などを指す。つまり、男性か女性か、あるいは、20代か40代かによって、ものの考え方が、大枠において、規定されるという見方である。

しかし、子どもたちの場合、学年や性別により、考え方やものの見方に開きが認められるのは確かだが、学業成績は、それ以上の重みを持つ。成績の良い子どもと、勉強の苦手な子どもとでは、テレビの見方や遊び方、そして、自己評価や将来の設計まで、違いが生じている。

子どもたちの価値観の中で、成績の持つ重みが、他の要素を圧倒して、肥大化している。その結果、価値観の中核に成績の良し悪しが位置してくる。そして、成績が良いとすべてが可能になると信じ、成績が不振だとすべてが閉ざされるといった見方が定着してくる。そうした見方を、成績モノカルチャーと名づけてみたい。



学力差をあらわにしない文化

今まで触れてきたように、子どもたちの中で、学業成績の比重は異常なまでに肥大している。

しかし、奇妙なことに、外国の学校をイメージに置くと日本の学校は比較しようのないほど、学力差をあらわにしない特性を持つ。

具体例を挙げるなら、欧米では、ことのよし悪しはともあれ、学力別編成がとられるのが通例で、特に、算数などでは、子どもをいくつかのグループに分けて、それぞれのグループごとに課題を与えている場合が多い。

したがって、登校から下校までの何時間かの中に、子どもたちは、興味や学力などに応じて、その時間帯なりのグループに属して学習に取り組む形となる。

日本の場合でも、第二次世界大戦まで、学級では級長制がとられており、級長になるた

めには、なによりもまず、成績の良さが必要であった。そして、級長は、級友を代表して、時間の始めと終わりごとに、「起立、礼」などの発声をするほか、腕章を巻いて、学級を指導する子どもとしてふるまっていた。

それだけに、級長は子どもたちのあこがれの的であった。自伝などを読むと、級長に任命された時の喜びを回顧している人が多い。

その他にも、明治時代には、試験の点数によって、落第する制度がとられていたし、学級の中の席順を、成績順とする場合も少なくなかった。

このように、かつての学校、そして、欧米の学校では、成績があらわにされるという理由から、子どもたちが、成績にこだわりを持ったとしても事情は理解できる。しかし、現代の日本の学校では、成績の良さが、学校内で表面化することはきわめて少ない。

学級委員は推せん、あるいは、投票によるので、必ずしも、成績に関連していないし、



通信簿にしたところで、かつての優・良・可に代わって、5段階評価、そして3段階評価と、成績差をあからさまに記入しない形が支配的になりつつある。

そうした事情に加え、戦後の学校では、学力差に対応した授業がタブー視され、学級を解体して、班学習を進める時にも、同レベルの子どもが群れをなす形をとる。

正直に言って、小学校低学年生ならともかく、4年生から上の学年になると、勉強が難しくなるから、学力差が顕然としてくる。もちろん、教師の努力により、学力差を縮めることは十分に可能であろうが、そうした教師の許では、知的な可能性に恵まれた子どもたちが、従来以上に、学力を伸ばすことも予想されるので、学力差が広がる場合もありうる。

したがって、学力差の少ない学級は、理論上では、望ましいものであっても、現実問題としては、程度の差はともあれ、学力差が生じるのはやむをえまい。となると、実際の運用の仕方にもよろうが、欧米のように、学力に対応したグループ編成をとる方が理にかなっていると言えなくもない。

成績モノカルチャーの幻想

もちろん、こうした場を借りて、学力別編成の必要性を説くつもりはない。というより、過教育の兆候の目につく学校教育の現状を考えると、せめて、学校では、理想の姿を求めて、学力差を意識させない教育に努めるべきだと思う。しかし、そうした反面、学力差をあらわにしない教育が、現実的な矛盾をはらんでいることにも留意しておく必要があらう。

しかし、それにしても、学校の中で、学力差をあらわにしていないのに、子どもたちの中に、成績崇拜にも似た感情が浸透しているのはなぜなのであらうか。

こうした書き方をすると、教育関係者から、子どもたちの成績意識をあおっているのは親



たちだという批判が出されやすい。もちろん、親たちの中に、そうした人がいるのも否定し難いが、その比率は必ずしも高くはない。

というより、教育についての知的水準が向上しているだけに、親たちの中にも、良識派が増加しており、成績がすべてといった見方をする人が少なくなっているのが現実の姿であらう。

したがって、子どもたちを成績モノカルチャーに駆り立てている主犯は誰なのかと、犯人探しをしていくと、学校も、そして家庭も、加害者とは言えないように思える。さらに言えば、社会全体の中で、学歴の占める重みが相対的に低下していることも注目しなう。

改めて触れるまでもなく、該当年齢の3割以上が進学する高学歴化社会の許では、大学卒が、かつてのような特権的な地位を保証することは少なくなった。学歴間の賃金格差が縮小の一途をたどっているのが、その例証とならう。

つまり、現在の学歴は、社会生活のスター

トをきるための基礎資格といった性格を強めており、マクロ的なとらえ方をすると、社会へ出てからの努力が、学歴以上にものをいう時代を迎えている。

それにもかかわらず、子どもたちは、良い高校に入り、いわゆる一流大学を出れば、明るい未来が約束されているという成績の良さの価値を過大に評価した見方をしすぎている。しかし、残念ながら、成績モノカルチャーは幻の産物にすぎない。

成績以外の尺度を

このように社会の中で、学歴の持つ重みが減っているだけでなく、学校の中でも、成績の良し悪しがほとんど問われない。そして、家庭も、必ずしも、子どもたちを学力競争に駆り立ててはいない。それにもかかわらず、子どもの心の内に、学力モノカルチャー的な見方が定着しているのは、すでに触れた通り

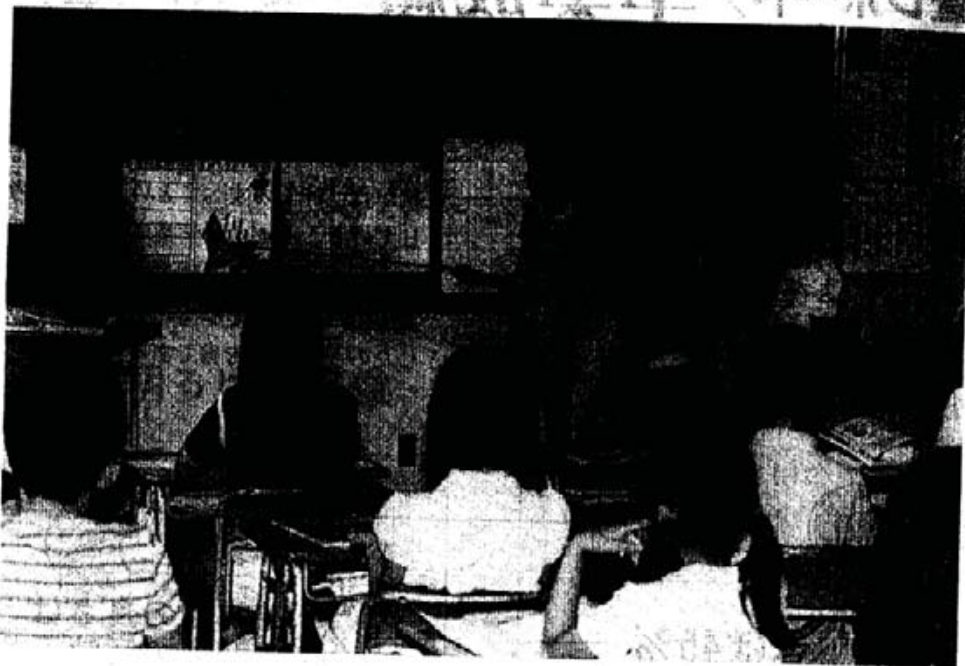
である。

となると、これといった原因を見い出せないのに、子どもたちの意識だけが深刻化していることにもなる。もちろん、子どもが、好んで、成績モノカルチャーを信じているとは思えないから、いわば、加害者不明のまま、事態だけが進展するといった奇妙な姿が浮かんでくる。

しかし、考えてみると、本当の意味で、加害者不在などというのはありえまい。学校でも、家庭でも、成績の良さが大事にされる。算数のテストで、60点をとるより、90点の方が望ましいのはいうまでもない。それだけに、努力をして、良い成績をとるようにといった指導が加えられる。

もちろん、そうした指導がいけないというつもりはない。古今東西を問わず、成績の悪さをほめられるなどといった学校はありえない。したがって、成績の良さへ向かって動機づけるのはよいのだが、考えてみると、現代





の子どもたちが、成績以外に、自己を評価するこれといった尺度を持っていないのに気づく。

そして、親や教師も、心の内で、成績を過大視する見方を抱いているのではないだろうか。体が丈夫で、やる気がありさえすれば、学歴に頼らなくとも、幸せな社会生活を営めるのが現状であろう。そうだとすれば、なにごとであれ、意欲を燃やす態度を、勉強と同じ程度に評価し、子どもを励ます態度が必要になる。あるいは、友だちに親切にする、いやな仕事をかってでる、そして、地味な仕事をやり抜くなども、おとなになってから、求められる属性となる。その他にも、絵がうまい、手先が器用、力持ち、友だちを引っばる力がある、読書量が多いな

ど、どの子どもも、その子どもなりの長所を備えていよう。そうした長所を見出し、その長所を自覚させ、自分なりの自信を持たせる。

子どもの個性に対応して、複眼の見方で子どもをとらえ、動機づける。そうした幅の広い見方が、おとなの中に薄れているのかもしれない。換言するなら、子どもたちの成績モノカルチャーは、学歴を過大評価するおとなたちの見方の反映のように考えられる。

しかし、先回りした形で、論を進めすぎた気もする。子どもたちが、本当に、成績モノカルチャー的な見方をしているのか、どうかが出発点となる。以下、調査結果を紹介しながら、子どもと学業成績との関連を深めていくことにしたい。

調査レポート／学業成績

放送大学教授 深谷昌志

勉強の得意、不得意は、遊びがうまい、へた、リーダーシップのあり、なし、体が丈夫、弱いなど同じように、子どもにとってひとつの属性であろう。

しかし、どうしたことか、この頃の子どもたちは、成績の良し悪しにこだわりを見せ、

成績が自己評価のすべてというような考え方をしている。そこで、学業成績の良し悪しを子どもたちがどのように考え、なぜ、あれほどまでのこだわりを示すのかを掘り下げようとしたのが、本報告書である。

要約

① ほぼ45%

授業が「ぜんぜんわからない」子どもはさすがに少ないが、半分程度しかわからない子どもは、過半数に近い。(表2)



② 成績の良さは努力の反映



子どもたちには、生まれつき勉強の得意な子どもはいない。授業をよく聞き、まじめに予習や復習をするから、成績が良くなると考えている。

(図2・表4)

③ 成績の良さは明るい未来を約束

まじめな態度で勉強をしている子どもの未来は明るい、子どもたちは考えている。(図3・表6)



④ 努力型の子ども

確かに、成績の良い子どもは、見たいテレビをがまんして勉強に打ち込んでいる子どもたちの中に多い。
(表9・表10)



⑤ 明るい自己像



成績の良い子どもは、すべての面で、明るい自己像を持っているだけでなく、明るい未来像を抱いている。
(図5・表16)

⑥ 暗い自己像

成績不振の子どもは、駄目な自分というイメージを強く抱いている。
(表21)



提言

学業成績が不振の子どもたちは、閉ざされた自己像を抱いている。そうした子どもたちに自信を与えたい。勉強が苦手な子どもたちを励まし、その子どもなりの努力の跡を認め、努力しているのであれば、努力そのものを成

績と切り離して、評価してあげよう。勉強が苦手なのは、ある程度やむをえないとしても、不必要なひけ目意識を持たせるのだけは避けたいと思う。

サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
5年	423	401	824
6年	305	290	595
計	728	691	1,419

調査概要

対象・東京と大阪近郊の小学5・6年生
時期・昭和57年11月
方法・学校通しによる質問紙調査

1. 勉強の得意・不得意はどの程度か



授業の理解度

まず、子どもたちは、自分の学業成績をどの程度だと思っているのであろうか。全体としての傾向を表1に掲げたが、大づかみにすると、以下のような3点を見い出しえよう。

①男女別

女子は男子より、国語好き(35%>27%)とても+かなり得意の割合以下同)だが、算数(47%>33%)、や理科(54%>31%)は、男子の方が好む割合が高い。

②学年差

学年が上がるにつれて

	5年	6年
国語	33%	> 27%
算数	45%	> 34%
理科	47%	> 38%

(とても+かなり得意な割合)

のように、勉強を得意だと思う割合が減る。

③全体として

勉強に苦手意識を持つ子どもは1割程度にすぎないが、かと言って、得意だと思える子どもも3~4割にとどまっており、大半の子どもは、「やや得意」「やや苦手」というようなどっちつかずの気持ちでいる。

この3点は経験的にも納得できるような数値だが、良い成績をとるためには、授業がわかることが前提となろう。そこで、授業の理解度を紹介すると表2の通りとなる。4教科の理解度を、仮りに平均値の形で試算してみれば

①全部わかる	16%	} 49%
②ほとんどわかる	33%	

表1・学業成績

(%)

目 的		尺 度	得 意			苦 手		
			とて も	か な り	や や や	や や や	か な り	とて も
国 語	学 年	5 年	12.2 ∇	20.5	36.1	22.5	5.3	3.4
		6 年	8.6	18.8	33.9	28.9	6.4	3.4
	性 別	男 子	9.2	17.4	32.3	27.6	7.7	5.8
		女 子	12.2 ∧	22.3	38.2	22.6	3.8	0.9
全 体			10.6	19.8	35.2	25.2	5.8	3.4
算 数	学 年	5 年	22.9 ∇	21.9	24.6	19.8	5.7	5.1
		6 年	16.1	18.2	25.8	23.4	10.3	6.2
	性 別	男 子	25.5	21.8	24.3	15.7	6.0	6.7
		女 子	14.4 ∇	18.7	26.0	27.2	9.3	4.4
全 体			20.0	20.3	25.2	21.3	7.6	5.6
理 科	学 年	5 年	20.0 ∇	26.6	32.6	16.1	3.2	1.5
		6 年	14.7	22.8	32.6	22.3	4.2	3.4
	性 別	男 子	25.6	28.7	26.6	14.0	2.9	2.2
		女 子	9.5 ∇	21.2	39.0	23.6	4.4	2.3
全 体			17.8	22.0	35.6	18.7	3.6	2.3
社 会	学 年	5 年	12.9 ∧	16.4	28.6	27.0	10.4	4.7
		6 年	15.3	17.5	24.9	26.3	9.9	6.1
	性 別	男 子	19.5	18.3	28.1	22.1	7.3	4.7
		女 子	8.0 ∇	15.4	25.9	31.5	13.3	5.9
全 体			13.9	16.9	27.0	26.7	10.2	5.3
図 工			19.4	21.4	27.3	19.1	7.9	4.9
音 楽			19.8	17.9	24.2	19.2	9.2	9.7
体 育			28.8	20.2	22.5	16.3	6.5	5.7

- ③わからない時もある 28%
 - ④半分半分 19%
 - ⑤ほとんどわからない 3%
 - ⑥ぜんぜんわからない 1%
- } 47%
- } 4%

となり、「大体わかるが、わからない時もある」が、子どもたちの平均的な心の内のように思われる。

小学校高学年ともなれば、学習内容に難し

さが増す。したがって、授業にある程度わかりにくさが生じるのはやむをえないことかもしれない。というより、半数近い子どもが授業は「ほとんどわかる」と答えているのは、見方によれば、教師の指導がかなり徹底している例証となろう。

もちろん、授業の理解度は、当然のことながら、学業成績によって異なる。図1(表3)

表2・授業がわかるか

(%)

尺度	わ か る			どちらともいえない			わ か ら な い			
	全 部	ほとん	小 計	わからな い時も	半分半分	小 計	ほとん	ぜんぜん	小 計	
国 語		13.8	36.6	50.4	28.6	19.2	47.8	1.2	0.6	1.8
		13.1	32.0	45.1	31.1	21.3	52.4	2.2	0.3	2.5
	計	13.5	34.6	48.1	29.7	20.1	49.8	1.6	0.5	2.1
算 数	5年	21.4	30.9	52.3	28.6	15.6	44.2	2.9	0.6	3.5
	6年	16.5	26.5	43.0	29.1	22.8	51.9	4.4	0.7	5.1
	計	19.4	29.1	48.5	28.8	18.6	47.4	3.5	0.6	4.1
理 科	5年	18.7	39.7	58.4	27.3	12.0	39.3	1.3	1.0	2.3
	6年	16.0	37.0	53.0	25.6	19.1	44.7	2.0	0.3	2.3
	計	17.6	38.5	46.1	26.6	15.0	41.6	1.6	0.7	2.3
社 会	5年	13.1	27.6	40.7	29.5	21.9	51.4	6.3	1.6	7.9
	6年	14.7	29.9	44.6	24.4	22.2	46.6	7.4	1.4	8.8
	計	13.8	28.6	42.4	27.3	22.0	49.3	6.8	1.5	8.3

から明らかなように、成績が上位の子どもの9割近くは、授業がわかると答えている。しかし下位に移るにつれてわかる割合が低下し、中位で約5割、「中の下」でほぼ3割、下位の子どもの理解度は1～2割となる。

授業が3割、あるいはそれ以下しかわからないとなれば、授業に出席しても苦痛であろう。そうした子どもが、すでに紹介した

表2によれば、2割を超える。となれば、
 ○授業もわかり成績に自信を持つ子ども 5割
 ○授業の理解度も今ひとつ、成績がもう一歩の子ども 3割
 ○授業がわからず、成績にも自信が持てない子ども 2割
 というあたりが、子どもたちの標準的なプロフィールのように考えられる。

図1・授業の理解度×成績

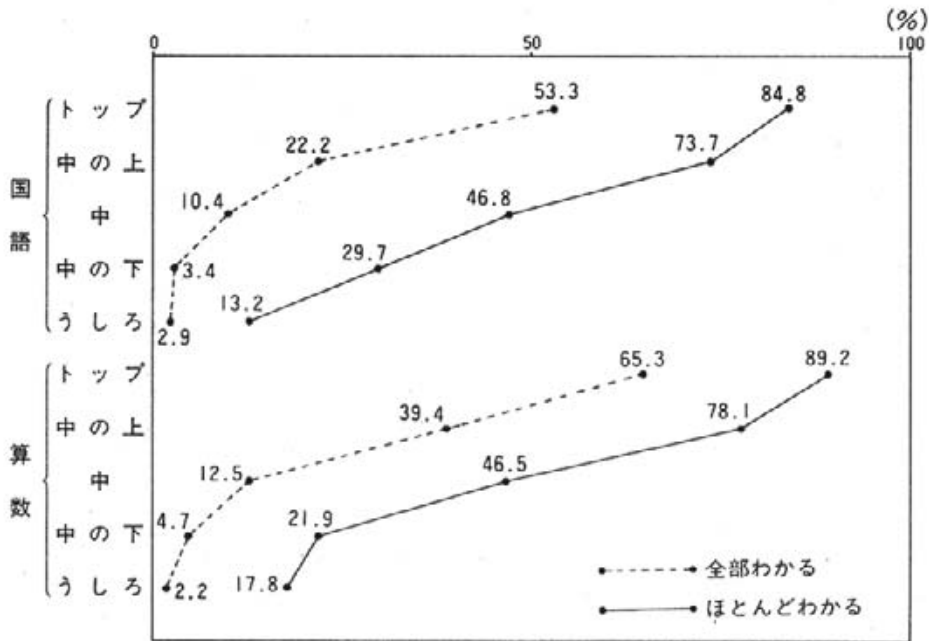


表3・授業の理解度×成績

(%)

科目	尺 度	わ か る		どちらともいえない		わ か ら な い	
		全 部	ほ と ん ど	わ か ら な い 時 も あ る	半 分 半 分	ほ と ん ど	ぜ ん ぜ ん
国 語	トップ	53.3	31.5	8.7	6.5	0.0	0.0
	中の上	22.2	51.5	20.6	4.8	0.6	0.3
	中	10.4	36.4	36.4	16.2	0.4	0.2
	中の下	3.4	26.3	30.3	38.3	1.0	0.7
	うしろ	2.9	10.3	30.1	42.7	11.8	2.2
算 数	トップ	65.3	23.9	6.5	4.3	0.0	0.0
	中の上	39.4	38.7	17.8	2.9	0.6	0.6
	中	12.5	34.0	36.2	15.5	1.6	0.2
	中の下	4.7	17.2	35.1	37.2	5.1	0.7
	うしろ	2.2	15.6	25.9	35.5	17.8	3.0
理 科	トップ	59.8	17.4	15.2	6.5	1.1	0.0
	中の上	27.6	45.1	18.1	7.9	1.0	0.3
	中	13.4	42.8	29.9	12.3	1.1	0.5
	中の下	7.8	33.0	30.7	26.4	1.4	0.7
	うしろ	5.2	30.6	30.6	23.9	6.7	3.0
社 会	トップ	51.0	28.3	7.6	9.8	2.2	1.1
	中の上	22.9	38.6	26.4	9.9	1.6	0.6
	中	9.3	32.1	33.1	20.1	4.9	0.5
	中の下	4.7	19.3	25.0	39.8	10.5	0.7
	うしろ	6.0	10.4	23.9	28.4	21.6	9.7

成績は努力を反映する

学業成績には、前記のような得意・不得意がある。子どもたちは、そうした開きが、どこから生ずると思っているのであろうか。

図2(表4)は、子どもたちに、「勉強がとても得意な子ども」と「勉強の苦手な子ども」とを想定させ、その子どもが「どんな子どもなのか」を考えさせた結果である。

図が示すように、子どもたちの反応は、素朴と言えるほどはっきりしている。つまり成績の良い子どもは、「授業をよく聞き、予習や復習をしっかりしているからで、生まれつき勉強が得意なのではない」。それとは逆に、勉強の苦手な子どもは、「生まれつき苦手なのではなく、授業に耳を傾けていず、予習や復習をさぼるからだ」という見方である。

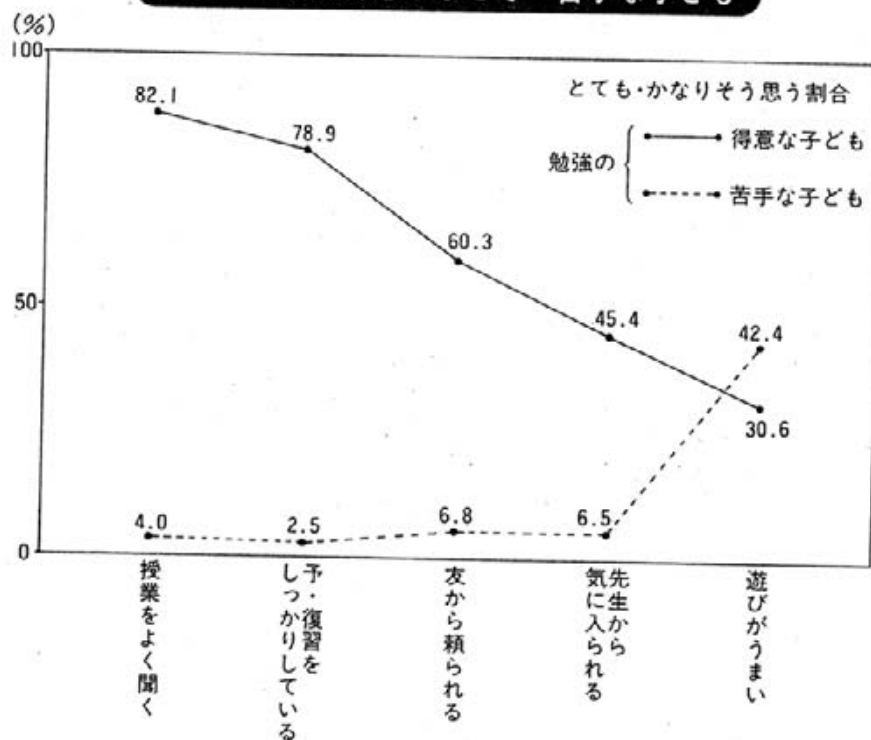
端的に言って、子どもたちは、成績は学習

努力を反映すると考えている。したがって、「勉強の得意な子ども」=まじめな努力家、「苦手な子ども」=勉強を怠けている子どもという見方が定着している。しかもそうした成績の良し悪しは努力を反映するという見方が、学年や性別、学業成績を問わず、ほとんどすべての子どもたちの間に定着しているのは、表5に、一例を示した通りである。

したがって、換言するなら、成績の良し悪しは、子どもの本務ともいべき勉強をきちんとまじめにしているかどうかを表す尺度となる。そのため、図3(表6)のような結果が得られる。

これは、図2と同じように、勉強の得意な子どもと苦手な子どもを想定してもらい、その子どもがどんなおとなになるかを推定さ

図2・勉強の得意な子ども・苦手な子ども



せたものだが、勉強の得意な子どもは、「新しい知識や技術を必要とする難しい仕事」につき、「社会の人から尊敬される」だけでなく、「近所の人に好かれる」、「幸せな家庭を築ける」だろうと言う。「まじめな努力型だから、仕事の面でも成功するだろうし、家庭生活もうまくいくだろう」と言うのが、勉強の得意な子どもに対する未来像となる。それに対し、勉強の苦手な子どもは、「怠けぐせがついているから、家庭生活の面ではともあれ、社会生活での成功はおぼつかないだろう」と言う。

成績の良さは、まじめさや努力を反映する

という見方に、一面の真理が含まれているのは否定し難い。また、学業不振ぎみの子どもに努力不足が感じられるのも、確かであろう。しかし、表7に一例を掲げたように「成績＝努力」の関係を、子どもたちがかたくなに、そして、強く信じているのが、やはり気がかりとなる。努力を重ねても、思うように成績の上がない子どもがいるのでは、と考えられるし、小型コンピューターのように記憶に強い子どもで、努力をしなくとも良い成績をとれる子どもの存在もありうる。

表4・勉強の得意な子ども・苦手な子ども

(%)

項目	尺 度			そ う			や や			違 う		
	とても	かなり	小 計	そ う	違 う	小 計	かなり	ぜんぜん	小 計			
勉強の得意な子ども	授業をよく聞く	52.8	29.3	82.1	10.9	3.2	14.1	2.0	1.8	3.8		
	予・復習をしっかりとっている	52.1	26.8	78.9	12.0	3.8	15.8	2.2	3.1	5.3		
	先生から気に入られる	24.1	21.3	45.4	28.7	12.8	41.5	4.7	8.4	13.1		
	友から頼られる	33.9	26.4	60.3	20.5	8.7	29.2	4.5	6.0	10.5		
	遊びがうまい	14.8	15.8	30.6	29.8	18.1	47.9	8.3	13.2	21.5		
	生まれつき得意	17.0	16.0	33.0	24.5	16.5	41.0	7.8	18.2	26.0		
勉強の苦手な子ども	授業をよく聞く	1.7	2.3	4.0	11.9	20.9	32.8	29.1	34.1	63.2		
	予・復習をしっかりとっている	1.1	1.4	2.5	5.5	18.2	23.7	28.5	45.3	73.8		
	先生から気に入られる	2.4	4.1	6.5	17.7	31.9	49.6	18.0	25.9	43.9		
	友から頼られる	2.2	4.6	6.8	12.2	21.8	34.0	23.4	35.8	59.2		
	遊びがうまい	26.0	16.4	42.4	19.3	13.3	32.6	11.2	13.8	25.0		
	生まれつき苦手	13.0	9.2	22.2	16.5	21.1	37.6	13.7	26.5	40.2		

表5・勉強の得意な子ども×属性

(%)

	学年	性別	成績	得意			不得意				
				とても	かなり	やや	やや	かなり	とても		
生まれつき勉強が得意	5年	男子	上	54.8	28.7	9.6	3.0	2.1	1.8		
				50.2	30.1	12.6	3.4	2.0	1.7		
	5年	女子	上	47.4	28.5	14.6	4.4	2.5	2.6		
				58.6	30.1	6.9	1.9	1.6	0.9		
	5年	男子	中	52.7	19.8	13.2	6.6	3.3	4.4		
				53.4	29.3	11.5	3.2	1.0	1.6		
	5年	女子	中	53.2	32.0	10.4	2.5	1.2	0.7		
				52.8	30.0	11.8	2.4	1.3	1.7		
	5年	男子	下	49.7	22.6	8.0	5.8	8.8	5.1		
				17.4	15.4	25.0	17.3	7.2	17.7		
5年	女子	下	16.5	16.8	23.8	15.4	8.7	18.8			
			17.0	15.5	22.2	15.9	8.6	20.8			
生まれつき勉強が不得意	6年	男子	17.0	16.5	26.9	17.1	7.0	15.5			
			6年	女子	18.7	14.3	17.6	17.6	6.6	25.2	
					上	14.8	12.9	24.4	19.6	10.0	18.3
						16.8	16.6	26.2	14.9	8.7	16.8
						16.9	18.6	25.7	16.9	5.7	16.2
16.9	18.6	25.7			16.9	5.7	16.2				
16.9	18.6	25.7	16.9	5.7	16.2						
6年	男子	下	22.4	15.7	20.1	13.4	5.2	23.2			
			22.4	15.7	20.1	13.4	5.2	23.2			

図3・勉強の得意な子ども・苦手な子どもの未来

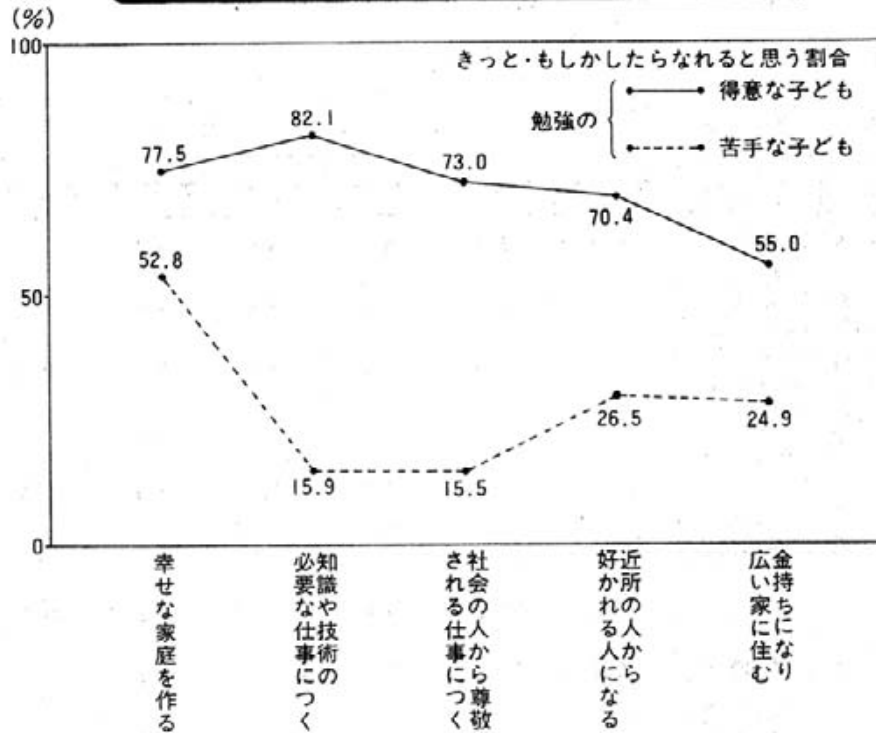


表6・勉強の得意な子ども・苦手な子どもの未来

(%)

項目	尺度	なれる			なれない			小計
		きっと	もしかしたら	小計	やや	かなり	とても	
勉強の得意な子ども	幸せな家庭を作る	38.8	38.7	77.5	10.8	5.2	6.5	22.5
	知識や技術の必要な仕事につく	22.9	59.2	82.1	10.0	3.2	4.7	17.9
	社会の人から尊敬される仕事につく	23.7	49.3	73.0	16.8	5.8	4.4	27.0
	近所の人から好かれる人になる	26.4	44.0	70.4	19.1	5.2	5.3	29.6
	金持ちになり広い家に住む	11.3	43.7	55.0	30.3	7.2	7.5	45.0
勉強の苦手な子ども	幸せな家庭を作る	13.0	39.8	52.8	21.6	11.0	14.6	47.2
	知識や技術の必要な仕事につく	1.8	14.1	15.9	28.6	27.5	28.0	84.1
	社会の人から尊敬される仕事につく	1.6	13.9	15.5	32.1	24.2	28.1	84.5
	近所の人から好かれる人になる	3.7	22.8	26.5	30.3	20.2	22.7	73.5
	金持ちになり広い家に住む	1.9	23.0	24.9	31.4	21.6	22.1	75.1

表7・新しい知識や技術のとても必要な仕事につける

(%)

尺 度	な れ る		無 理				
	さ ー と	も し か し た ら	や	か な り	と て も		
別 な 子		22.5	59.4	10.5	3.5	4.1	
		23.4	59.2	9.3	2.7	5.4	
		24.4	53.0	11.7	4.1	6.8	
		21.3	65.9	8.1	2.2	2.5	
		30.8	50.5	6.6	4.4	7.7	
成 績	中 の 上	23.9	61.5	7.3	3.5	3.8	
	中	22.1	64.0	8.4	1.6	3.9	
	中 の 下	21.4	56.9	13.9	3.4	4.4	
	う し ろ	22.2	45.2	15.6	8.1	8.9	
勉 強 の 苦 手 な 子 ど も	学 年	5 年	1.3	13.8	28.3	27.6	29.0
		6 年	2.4	14.5	29.2	27.2	26.7
	性 別	男 子	2.6	12.3	26.4	24.7	34.0
		女 子	0.9	15.9	31.1	30.4	21.7
		ト ッ プ	5.4	17.4	21.7	20.7	34.8
	中 の 上	2.2	11.8	26.2	29.1	30.7	
	中	1.2	13.0	30.5	29.2	26.1	
	中 の 下	1.0	15.5	32.7	29.6	21.2	
	う し ろ	1.2	16.9	22.1	17.6	42.2	

2. 勉強の得意・不得意とその背景



成績と家庭学習

そこで、成績の良し悪しと努力とが、どの程度関連しているのかを調べてみよう。

表8は、家庭学習の長さを調べたものだが、子どもたちに記入を求める形をとったので、数値が必ずしも客観的な妥当性を持つとは言い難い。ただ、子どもたちが、自分はこれくらい勉強をしている、と思っている気持ちだけは正確に表していよう。

そうした留保条件をつけた上で、表8を目にすると、家庭学習についての子どもの気持ちは、

「今のところ、平均して1時間15分程度、勉強をしている。先生や親たちは、もう30分ぐらい、長いのを望んでいるらしいが、そこまでは勉強をしていない。しかし、中学生になったら、今より1時間ぐらいよけいに勉強

することになりそうだし、高校に入ったらさらに30分は延びて、勉強時間は3時間近くになるにちがいない」となる。

もちろん、これは平均的なプロフィールだが、これを学業成績別に集計し直してみると、表9の通りとなる。

成績のトップの子どもたちは、親や教師の期待に添う形で、2時間を勉強に費やしている。しかし、成績が下位になるにつれて、勉強時間は減り、下位の子どもたちの家庭学習の長さは、平均して45分程度となる。

さらに、表10によれば、余暇時間の使い方も、学業成績によって異なっており、成績上位群のテレビ視聴時間は2時間強にすぎないが、中位で2時間半、下位で3時間と、下位

になるにつれて、視聴時間が延びる。それと同時に、外で遊ぶ時間やマンガを見る時間が増すのも、表中の数字の示す通りである。

したがって、やや図式化してとらえるなら調査結果を手がかりとする限りでは、

テレビやマンガを見て、怠けている子ども
= 勉強の苦手な子ども
テレビやマンガをがまんして、勉強を頑張っている子ども
= 勉強の得意な子ども
という関係が成り立ちうる。

表8・勉強時間の変化

(%)

尺度	勉強時間								サンプル平均	5年生平均	6年生平均
	0分	30分	1時間	1.5時間	2時間	2.5時間	3時間	3.5時間			
母の期待	10.9	22.6	25.0	18.9	10.9	4.4	3.2	4.1	1.14	1.12	1.17
先生の期待	2.4	6.5	22.8	20.6	23.7	7.9	7.8	8.3	1.43	1.40	1.48
中学生になったら	3.0	4.8	21.1	22.5	27.1	9.0	5.0	7.5	1.44	1.43	1.47
高校生になったら	0.6	1.8	7.3	12.4	23.8	20.5	18.7	14.9	2.20	2.22	2.18
	0.5	0.4	2.5	5.2	12.0	13.9	23.3	42.2	2.53	2.55	2.50

表9・勉強時間×成績

(%)

尺度	0分	30分	1時間	1.5時間	2時間	2.5時間	3時間	3.5時間	サンプル平均	母の期待	先生の期待	中学生になったら	高校生になったら
トップ	4.3	8.7	14.1	17.4	16.3	10.9	14.3	14.0	2.00	2.18	2.01	2.51	3.11
中の上	6.3	15.6	19.4	23.2	17.5	6.0	6.3	5.7	1.30	1.56	1.43	2.33	3.02
中	9.8	19.7	28.8	20.4	12.0	5.1	2.3	1.9	1.12	1.43	1.43	2.20	2.53
中の下	13.9	32.0	29.4	15.2	5.4	0.7	2.4	1.0	0.55	1.37	1.49	2.13	2.43
うしろ	24.3	38.2	19.2	11.7	0.7	1.5	1.5	2.9	0.45	1.35	1.43	1.51	2.30

表10・余暇時間×成績

成績	トップ	中の上	中	中の下	うしろ
	時間分	時間分	時間分	時間分	時間分
	2.04	2.23	2.30	2.51	3.03
	1.29	1.48	2.05	2.13	2.20
	1.11	1.06	0.56	0.50	0.48
	0.49	0.53	0.59	1.11	1.32

○=最大値

授業に臨む態度

したがって、成績の良さは努力の反映という見方は、子どもたちの生活面からとらえても、ある程度の妥当性を含んでいると言わざるを得ない。

しかし、結論を出すのは、もう少し先にのばし、成績と学習努力との関係を調べてみよう。

表11に、子どもたちの授業中の態度を示した。全体として、ある程度手をあげ、あまりよそ見をせず、わからないから下を向くことなく授業に臨んでいるようだが、これを学業成績別に集計してみると、表12の通りとなる。

	トップ	うしろ
①手をあげる	64%	> 4%
②指名される	25%	> 7%
③よそ見をしない	52%	> 18%
④自分の考えが通る	47%	> 10%
⑤下を向くことはない	83%	> 35%

つまり、よそ見をせず、どんどん手をあげ、積極的に発言しているのが成績が上位の子どもなのに対し、下位の子どもたちは、わからないので下を向き、手をあげることなく、ついでよそ見をしたりして授業時間を過ごすスタイルとなる。

なお、表13に、勉強の仕方の質問結果を示

したが、全体としてみると、「宿題をする」「先生の話聞く」「ノートの字をきれいに書く」などのいわば義務的な学習習慣は、かなりの程度定着している。しかし、「予・復習をする」や「予定を立てて勉強をする」などの勉強の自主的な面は、不十分な印象を受ける。

言われたことはしているが、それ以上、自分から積極的に勉強するまでには意欲が及んでいないのであろう。しかし、表14から明らかのように、勉強に対する構えについても、

○成績が上位の子ども＝「話を聞く」「宿題をする」はむろんのこと、「ノートのとり方の工夫」や「勉強の予定を立てる」などをいつもきちんとしている

○中の上、あるいは中位の子とも＝そうしたことも、いつもとは言えないが、だいたいしている

○中の下、あるいはうしろの子ども＝そうした構えが、あまりできていない

といった結論が得られる。

こうした傾向は、図4（詳しくは表15）に端的に表れており、

勉強を { 頑張っていると思う子ども＝上位群
ふつうぐらいだと思う子ども＝中位群
怠けていると思う子ども＝下位群

のような結果が得られている。

表11・授業中の態度

(%)

尺度	多 い			や や			少 ない		
	とても	かなり	小 計	多 い	少ない	小 計	かなり	とても	小 計
		7.9	12.0	19.9	24.0	29.3	53.3	15.1	11.7
	2.0	6.1	8.1	22.8	34.5	57.3	21.2	13.4	34.6
	5.6	10.7	16.3	27.8	26.0	53.8	20.4	9.5	29.9
	2.5	4.5	7.0	13.4	26.4	39.8	24.2	29.0	53.2

表12・授業の態度×成績

(%)

項目	尺度	多 い			や や			少 ない		
		とても	かなり	小 計	多 い	少ない	小 計	かなり	とても	小 計
手をあげる	トップ	42.8	20.9	(63.7)	19.8	7.7	27.5	5.5	3.3	8.8
	中	3.9	11.3	15.2	26.1	36.2	(62.3)	13.9	8.6	22.5
	うしろ	2.9	1.5	4.4	7.3	21.2	28.5	28.5	38.6	(67.1)
先生からの指名	トップ	8.7	16.3	25.0	23.9	19.6	(43.5)	15.2	16.3	31.5
	中	0.7	5.1	5.8	25.0	36.7	(61.7)	21.0	11.5	32.5
	うしろ	3.7	2.9	6.6	10.3	30.1	40.4	31.7	21.3	(53.0)
よそ見をする	トップ	4.4	7.7	12.1	15.4	20.9	36.3	25.3	26.3	(51.6)
	中	3.9	9.8	13.7	25.4	29.5	(54.9)	22.3	9.1	31.4
	うしろ	10.3	19.1	(29.4)	28.7	23.5	52.2	12.5	5.9	18.4
自分の考えが通る	トップ	16.5	30.8	(47.3)	36.2	12.1	48.3	2.2	2.2	4.4
	中	3.9	10.8	14.7	36.7	31.7	(68.4)	11.0	5.9	16.9
	うしろ	2.3	7.5	9.8	12.8	35.3	48.1	18.0	24.1	(42.1)
下を向く	トップ	2.2	1.1	3.3	5.4	8.7	14.1	10.9	71.7	(82.6)
	中	1.1	2.3	3.4	13.7	30.3	(44.0)	29.0	23.6	52.6
	うしろ	14.2	14.2	(28.4)	14.2	22.4	36.6	14.9	20.1	35.0

○=最大値

表13・勉強の仕方

(%)

勉強の仕方	よくしている		小計	まあまあしている	よくしていない	
	いつも	だいたい			あまり	ぜんぜん
予定表を立てて勉強する	42.5	28.6	71.1	18.1	9.3	1.5
予定を立てずに勉強する	14.9	43.1	58.0	32.9	7.8	1.3
教科書の内容を覚える	34.1	22.6	56.7	15.0	19.0	9.3
問題を覚える	12.3	28.8	41.1	26.2	25.6	7.1
先生の取りかたを覚える	13.1	20.9	34.0	28.0	28.9	9.1
勉強計画を立てる	22.0	18.8	40.8	16.3	23.0	19.9
問題を覚える	10.0	15.6	25.6	19.8	33.9	20.7
予定を立てずに勉強する	8.8	14.6	23.4	18.4	32.3	25.9
予定をいつもする	7.3	11.6	18.9	18.9	36.3	25.9



表14・勉強の仕方×成績

(%)

成績	勉強の仕方	そうしている		そうしていない			
		いる	いない	いる	いない		
十分	トップ	(57.9)	21.1	79.0	14.4	4.4	2.2
	中の上	(53.7)	30.3	84.0	10.2	4.8	1.0
	中	(47.4)	29.0	76.4	17.4	6.0	0.2
	中の下	27.5	(32.2)	59.7	25.4	12.5	2.4
	うしろ	19.3	17.0	36.3	26.7	(31.1)	5.9
やや	トップ	(41.3)	35.9	77.2	16.3	4.3	2.2
	中の上	21.6	(56.2)	77.8	16.5	5.4	0.3
	中	13.2	(47.9)	61.1	34.8	3.2	0.9
	中の下	6.4	32.0	38.4	(47.8)	13.1	0.7
	うしろ	7.4	20.6	28.0	(41.1)	24.3	6.6
不足	トップ	28.3	(32.6)	60.9	10.9	21.7	6.5
	中の上	19.7	24.2	43.9	(28.0)	21.7	6.4
	中	11.6	23.1	34.7	(30.6)	28.2	6.5
	中の下	8.8	14.5	23.3	30.4	(37.5)	8.8
	うしろ	3.7	9.7	13.4	23.9	(35.1)	27.6
不足を立地で勉強する	トップ	(26.0)	19.6	45.6	20.7	19.6	14.1
	中の上	11.5	20.1	31.6	21.3	(27.0)	20.1
	中	7.4	15.4	22.8	20.5	(32.8)	23.9
	中の下	4.4	7.4	11.8	16.6	(39.2)	32.4
	うしろ	6.7	10.4	17.1	6.7	34.8	(41.4)

○=最大値

図4・家庭学習の頑張り×成績

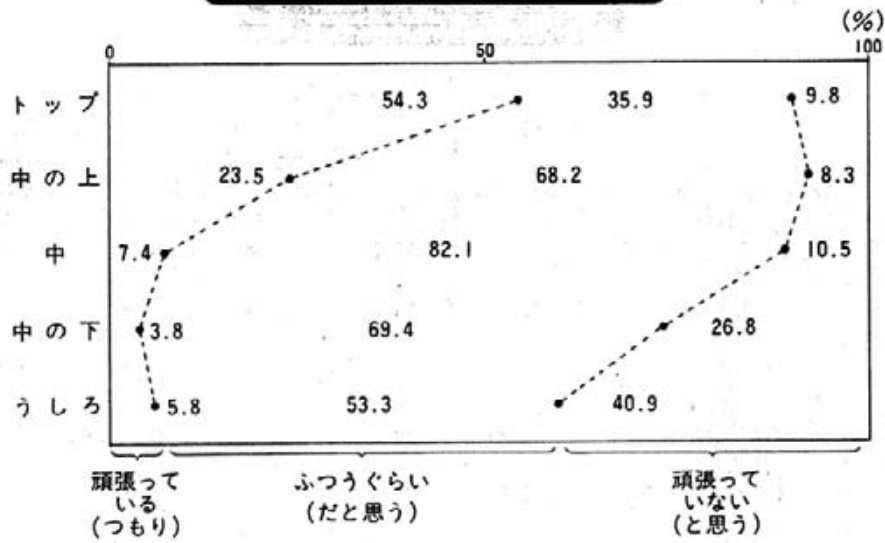


表15・頑張り×成績

(%)

項目	尺度	頑張る(熱心)			やや・ふつう			頑張っていない(不熱心)			
		とても	かなり	小計	やや	ふつう	やや	小計	あまり	ぜんぜん	小計
家庭での勉強	トップ	32.6	21.7	54.3	16.3	17.4	2.2	35.9	6.5	3.3	9.8
	中の上	5.7	17.8	23.5	27.1	37.3	3.8	68.2	5.1	3.2	8.3
	中	1.8	5.6	7.4	13.0	61.7	7.4	82.1	7.2	3.3	10.5
	中の下	1.4	2.4	3.8	6.8	48.7	13.9	69.4	20.7	6.1	26.8
	うしろ	3.6	2.2	5.8	5.8	32.2	15.3	53.3	24.1	16.8	40.9
	全体	4.7	8.4	13.1	14.5	47.7	8.3	70.5	11.2	5.2	16.4
先生の話を聞いているか	トップ	19.6	24.9	44.5	20.7	20.7	5.4	46.8	5.4	3.3	8.7
	中の上	5.7	18.5	24.2	32.2	34.4	4.5	71.1	2.5	2.2	4.7
	中	1.8	6.0	7.8	21.5	56.3	8.8	86.6	4.4	1.2	5.6
	中の下	0.7	2.7	3.4	10.2	56.2	14.9	81.3	12.9	2.4	15.3
	うしろ	2.9	1.5	4.4	5.8	36.5	16.8	59.1	22.6	13.9	36.5
	全体	3.7	8.9	12.6	19.8	47.4	9.6	76.8	7.6	3.0	10.6

3. 成績の良し悪しと自己像との関連



成績の良い子どもの自己像

今まで触れてきたことを要約するなら、勉強の得意な子どもたちは、下位の子どもと比べ、

- ①家庭学習の時間が長い
- ②テレビやマンガをがまんしている
- ③予習や復習をきちんとしている
- ④計画を立てて勉強をしている
- ⑤授業中に、熱心に先生の話聞く

などの面で、有意な差を示していた。

そうだとすると、少なくとも統計的にみる限りでは、成績の良さは努力、あるいは禁欲的な態度の表れとみなすのが妥当と思わざるを得ない。

成績の良さが、まじめさや努力、頑張りぶりなどを示すものだとするなら、当然のことながら、成績の上位の子どもたちは、自分自

身に明るいイメージを持ち、それに対し、下位の子どもたちは、怠け者で駄目な自分という自己像を抱いている。

図5(表16)は、自己像と成績との関連を示している。勉強の得意な子どもたちが、まじめで、頑張りがきく、責任感の強いなどの自己像を持つのは、今までの結果からも、理解できる。しかし、図5によれば、成績上位群は、その他の「友だちが多い」「遊びがうまい」「友だちに親切」など、勉強や学習態度などとの関連の薄い領域についても、明るい自己像を抱いている。

つまり、勉強の得意な子どもは、遊びから友だち、勉強まで、すべての面で、自分に自信を持つのが目につく。次いで、成績が「中の上」層(表16)の自己像も明るい。しかし、

中位から下位にかけては、自分に自信を持っていないという意味で、図5のように、共通のプロフィールを示している。

しかも、成績と自己像との関連は、現在だけでなく、未来にも関連してくる。表17に進学の見通しを成績とクロスさせた結果を示した。進学は、成績との関連が強いので、当然とも言えようが、

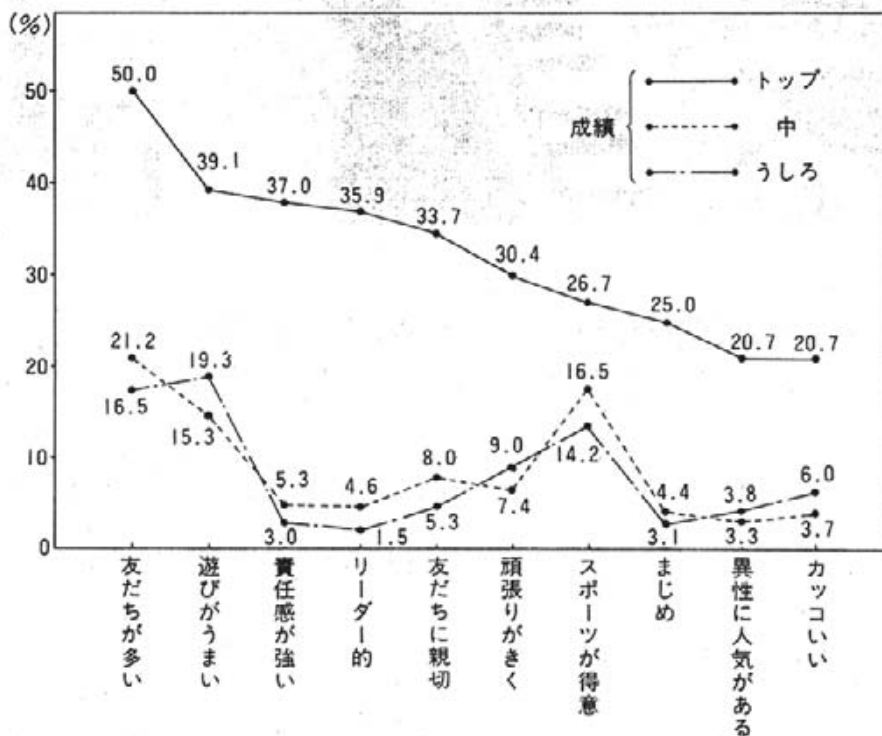
	望みの高校進学	望みの大学進学
トップ	89%	87%

中の上	78%	68%
中	59%	43%
中の下	30%	17%
うしろ	18%	10%

となる。小学生のうちから、成績の中位の子どもたちの約半数、中の下だと、7割以上、そして、下位の子どもでは、8~9割が、望みの高校や大学へ入れない自分を予感している。

しかも、表18によれば、成績と将来の見通

図5・自己評価×成績



しとの関連は、進学に限らず、おとなになっ
てからの生活全般にまで影を及ぼしている。
つまり、成績の良い子どもたちは成人して

から、「新しい知識や技術の求められる」、
「社会から尊敬される」人になれるだけでなく、
「広い家に住み」、「近所の人から好かれ」、

表16・自己評価×成績

(%)

		トップ	中の上	中	中の下	うしろ	合計
		○50.0	> 28.7	> 21.2	> 19.0	> 16.5	23.7
		(73.9)	(52.2)	(39.7)	(31.4)	(30.0)	(42.0)
		○39.1	> 23.6	> 15.3	16.4	19.3	19.2
		(53.2)	(38.6)	(31.0)	(31.3)	(30.4)	(34.0)
		○37.0	> 9.9	> 5.3	> 5.2	> 3.0	8.2
		(55.5)	(25.9)	(13.3)	(7.6)	(4.5)	(16.9)
		○35.9	> 12.0	> 4.6	> 3.1	> 1.5	7.7
		(54.4)	(25.3)	(12.3)	(8.3)	(2.3)	(16.2)
友だちに親切	とても	○33.7	> 11.5	> 8.0	> 7.8	> 5.3	10.2
		(54.4)	(31.3)	(20.9)	(18.0)	(12.8)	(24.2)
頑張りが多い	とても	○30.4	> 11.2	> 7.4	> 5.1	9.0	9.5
		(58.7)	(31.6)	(19.1)	(14.0)	(12.8)	(22.8)
スポーツが得意	とても	○26.7	> 22.9	> 16.5	> 17.3	> 14.2	18.4
		(44.5)	(37.2)	(29.9)	(32.6)	(25.4)	(32.4)
まじめ	とても	○25.0	> 8.3	> 4.4	> 2.1	3.1	6.0
		(42.4)	(21.1)	(9.6)	(5.6)	(3.9)	(12.9)
異性に 人気がある	とても	○20.7	> 7.3	> 3.3	> 2.7	3.8	5.3
		(29.4)	(13.0)	(5.9)	(5.1)	(6.1)	(8.9)
カッコいい	とても	○20.7	> 6.1	> 3.7	> 3.4	6.0	5.5
		(26.1)	(11.2)	(5.6)	(5.1)	(9.0)	(8.4)

注) ()はとても+かなりそう思う割合

○=最大値

「幸せな家庭を築ける」だろうと信じている。成績の良さが、すべてを可能にする打手の小槌でもあるかのような感じ方である。成績上

位群が、そう思うのはかまわないのだが、中位から下位へ移るにつれて、そうした小槌を持ってない子どもが増加してくる。

表17・進学見通し×成績

(%)

進学見通し	入る			出ない			小計
	きつと	もしかしたら	小計	やや	かなり	とても	
望みの大学	42.4	46.7	89.1	2.2	2.2	6.5	10.9
	13.1	65.1	78.2	12.5	5.8	3.5	21.8
	4.2	55.1	59.3	27.0	9.3	4.4	40.7
	1.4	28.5	29.9	36.3	16.9	16.9	70.1
	3.7	14.0	17.7	16.2	20.6	45.5	82.3
	8.0	47.2	55.2	23.1	10.7	11.0	44.8
望みの大学	40.7	46.2	86.9	3.3	3.3	6.5	13.1
	10.0	57.7	67.7	19.1	7.4	5.8	32.3
	3.7	39.7	43.4	33.7	13.9	9.0	56.6
	0.3	16.6	16.9	35.8	20.6	26.7	83.1
	2.2	7.4	9.6	12.6	17.8	60.0	90.4
	6.6	36.1	42.7	27.0	13.5	16.8	57.3

○=最大値

表18・達成の見通し×成績

(%)

達成の見通し	トップ	中の上	中	中の下	おしり	全体
	57.6	34.4	27.1	24.7	17.0	29.3
	32.6	52.1	52.5	45.3	31.9	47.7
○	90.2	86.5	79.6	70.0	48.9	77.0
	34.8	7.7	4.6	2.7	3.7	6.7
	38.0	50.3	39.1	25.4	19.3	36.9
○	72.8	58.0	43.7	28.1	23.0	43.5
	28.3	3.5	2.8	1.7	3.7	4.5
	48.9	48.2	34.2	19.9	19.1	34.0
○	78.2	51.7	27.0	21.6	22.8	38.5
	27.2	5.1	2.8	2.4	3.7	4.9
	27.2	37.6	30.7	18.6	17.2	28.3
○	54.4	42.7	33.5	21.0	20.9	33.2
	23.9	4.5	1.1	0.7	0.0	3.1
	44.6	46.3	31.3	14.6	16.3	30.6
○	68.5	50.8	32.4	15.3	16.3	33.7

○=最大値

成績下位群の自己像

それだけに、成績下位群の子どもたちが、どんな自己像を抱いているのかが気になりとなる。

表19に示したように、これより上がりようのないトップ層は別として、その他の子どもたちも、中の上の子どもは、できたらトップへ、そして、中位の子どもは、せめて、中の

上位へ、さらに、下位の子どもは、中位まで、成績を伸ばしたいと考えている。

しかし、表20によれば、現在の成績は、小学1～2年生の頃を基本的にはうけついでおり、そして、中学生や高校生になっても、そうした状況に大きな変化はないと、子どもたちは考えている。

したがって、成績が中位以下の子どもは、希望はともかく、現実の問題としては、成績が現状のままで推移するのを予感している。

しかも、すでに触れたように、成績は努力の反映という見方が定着しているので、成績不振は、努力不足、つまり、怠けものを意味する。そのため、表21に掲げたように、成績が下位になるにつれて、特に下位層の子どもたちの内に

- ①勉強に向いていない
- ②幼稚園の頃が楽しかった
- ③学校へ行きたくない
- ④先生は自分の良さを認めてくれない
- ⑤友だちができてにくい

など、現在の自分を否定的にとらえる傾向が強まってくる。

さらに、表22からうかがえるように、「どんなに頑張っても、絶対になれないだろう」というあきらめが、下位層へいくほど強まってくる。しかも、そうした断念率の高さが、医師や大学教授のような高学歴取得を前提とする職種だけでなく、歌手やマンガ家、プロスポーツの選手など、学業成績との関連の薄い仕事への断念率にも表れてくる。

頑張りの足りない自分は、将来、大した仕事につけそうにない、大きくはなりたくない、幼い頃に戻りたい。そうした暗い自己像が下位層に多い。

表19・成績と希望

(%)

成績	希望				
	トップ	中の上	中	中の下	うしろ
トップ	90.2	5.4 + 1.1 + 0.0 + 3.3 = 9.8			
現 中の上	71.0	23.5	3.2 + 1.3 + 1.0 = 5.5		
中	25.2	65.1	6.7	2.3 + 0.7 = 3.0	
中の下	15.3	51.7	28.9	2.7	1.4
うしろ	14.8	30.4	40.0 + 6.7 = 91.9		8.1

○=最大値

表20・成績の変化の予測×成績

(%)

成績		得意			苦手		
		とても	かなり	やや	やや	かなり	とても
中位		40.3	31.5	14.1	7.6	1.1	5.4
		37.0	38.0	16.3	5.4	1.1	2.2
		50.0	35.6	6.7	6.7	1.0	0.0
		40.4	20.4	27.2	6.5	2.2	3.3
		38.0	21.7	27.2	8.7	1.1	3.3
下位	小学1～2年生	15.7	26.6	37.3	15.1	3.2	2.1
	小学3～4年生	5.1	16.5	49.4	25.0	3.5	0.5
	現在	1.8	12.0	46.8	34.3	4.4	0.7
	中学生	4.0	17.3	40.7	29.2	7.2	1.6
	高校生	8.8	18.8	34.1	25.8	8.3	4.2
平均	小学1～2年生	10.9	11.7	24.8	29.3	10.9	12.4
	小学3～4年生	2.2	3.7	22.2	41.6	17.0	13.3
	現在	1.5	3.0	10.4	29.1	25.4	30.6
	中学生	1.5	6.0	12.7	26.1	27.6	26.1
	高校生	4.5	7.5	11.9	27.6	17.2	31.3
平均	小学1～2年生	18.5	23.2	32.5	17.3	4.7	3.8
	小学3～4年生	8.7	18.5	40.1	25.9	4.7	2.1
	現在	6.5	17.7	33.8	29.7	7.9	4.4
	中学生	6.9	18.9	34.0	24.9	10.2	5.1
	高校生	11.0	20.4	29.7	22.3	8.8	7.8

表21・暗い自己像×成績

(%)

項目	回答	成績					合計
		トップ	中の上	中	中の下	下	
暗い自己像	とても	5.4	5.2	7.6	21.7	41.7	13.1
		(10.8)	(12.1)	(19.8)	(46.9)	(65.9)	(27.5)
		20.7	17.9	19.2	26.0	33.8	22.0
		(30.5)	(26.2)	(34.5)	(42.4)	(47.3)	(35.4)
暗い自己像	とても	15.4	13.4	13.3	14.1	29.0	15.1
		(27.5)	(27.5)	(31.4)	(35.4)	(45.0)	(32.3)
暗い自己像	とても	10.9	7.0	6.6	11.2	26.9	9.9
		(19.6)	(14.3)	(17.8)	(28.5)	(47.8)	(22.3)
暗い自己像	とても	5.4	6.4	5.8	7.1	19.7	7.5
		(16.3)	(10.2)	(11.4)	(19.7)	(29.6)	(14.9)
先生は自分の良さを認めてくれない	とても	9.9	6.7	6.4	8.9	18.0	8.4
		(29.7)	(15.7)	(16.0)	(22.9)	(29.3)	(19.6)
友達が友達らしくて楽しくない	とても	4.3	6.1	5.0	9.5	17.2	7.3
		(10.8)	(11.2)	(11.2)	(17.0)	(27.6)	(13.9)
おとなになりたくない	とても	10.9	10.3	8.7	12.6	13.2	10.5
		(23.9)	(26.0)	(21.2)	(29.3)	(26.4)	(24.7)

注) ()はとても十かなりそう思う割合

○=最大値

表22・職業は達成への断念×成績

(%)

	トップ	中の上	中	中の下	ナシ	全体
	46.7	40.4	38.3	47.5	68.4	44.1
	37.0	36.5	35.3	39.4	59.6	38.9
	33.7	34.0	36.7	44.9	64.9	40.5
	31.5 <	43.5 <	55.4 <	62.6 <	79.6	55.2
	20.7 <	32.7 <	46.7 <	60.1 <	80.0	47.8
	26.7 <	31.2 <	41.8 <	57.6 <	77.8	44.7
	20.7 <	42.2 <	57.5 <	67.6 <	83.6	56.4
	17.4 <	19.2 <	29.6 <	39.9 <	71.3	32.7
	16.3 <	31.1 <	44.5 <	55.4 <	71.9	44.5
	16.3 <	33.1 <	39.6 <	49.7 <	72.6	41.8

注) どんなに頑張っても絶対になれないと思う割合

○=最大値